

ふるさと 吉富町

私たちが暮らす「吉富町」には、現在に至るまでの数々の歴史があります。そして、そこには現在の快適な生活のベースがあります。そんなふるさと吉富町について、いろいろな視点からご紹介していきます。

第33回 「ヨシトミ」の煙突とともに

町の代名詞「製薬」

九州で一番小さな吉富町の北側、周防灘を臨む広大な工場用地。約40ヘクタールにのぼるその敷地では、「田辺三菱製薬工場(株)吉富工場」とその



町中から煙突を望む

関連会社が操業しています。その昔は「吉富製薬株式会社」と町名を冠した社名が付けられるなど、まさに町の代名詞とも言える製薬工場で、敷地内にそびえ立つ「ヨシトミ」の文字が入ったシンボリックな赤白の煙突がとても印象的です。あの煙突を目にして「ああ、吉富に帰ってきたな」と感じた経験を持つ方も多くいらっしゃるのではないでしょうか。今回は、町制施行と時を同じくして操業を開始し、町と歩みを共にしてきた「吉富製薬」誕生の歴史を振り返ります。

激動の時代の船出

吉富町誌によると、昭和12、3年頃の「人造絹糸業界」発展期には、この敷地に製糸工場建設の計画があったとも言われています。ところがその計画が中止になり、当時の東吉富村長らが誘致運動をしているさなか、新工場建設を計画していた「(株)武田長兵衛商店」の思惑と合致し、昭和14年に工場用地として決定し、翌年、新会社(武田化成(株)、のちの吉富製薬(株))の設立が実現しました。戦時下の工場建設は難事業となりましたが、昭和17年5月19日、厚生省・陸軍省・福岡大分両県下の官民有志ら250名が列席し、盛大な竣工式が挙行されました。そしてこの日は吉富町の町制が施行されたまさにその日でもあり、町内は祝賀ムード一色となりました。

その後、軍需工場の指定を受けた武田化成では、抗マリア剤など軍の重要医薬品の受注も多くあったそうです。終戦後は、進駐軍当局から伝染病対策のための医薬品が重要医薬品に指定され、全国トップクラスの生産を続けました。その後、昭和21年には「吉富製薬株式会社」と改称、親会社であった武田薬品工業から離れ、独立企業として新発足となりました。



設立当時の様子

町の基幹産業として

昭和24年、昭和天皇が御巡幸で吉富製薬工場をご訪問された折には、従業員総出で歓待する様子や当時の工場長が工場内をご案内する様子が写真に残されています。その後も、工場増設や国内外の会社との提携などを続け、日本を代表する製薬会社としての躍進を続けていきます。

平成12年、会社の吸収合併などにより「吉富製薬」という社名がついに消滅しますが、慣れ親しんだ「製薬」という呼び名は日常から消えることなく、平成19年に「田辺三菱製薬工場(株)」となり現在に至ります。シンボルの赤白煙突は昭和56年に建設されたもので高さ70m、赤と白で交互に10mずつ塗り分けられています。煙突の機能としては現在のボイラーの規模では20mの高さがあれば十分なのですが、会社のご厚意で昔の姿のまま残されています。

一方で、吉富駅舎の寄贈や、体育館・フォーユー会館建設のための寄附など、積極的な社会貢献活動も行われてきました。夏の風物詩として恒例行事となっている「夏祭り」も今年で46回を数え、地域に根差した製薬工場として、その存在はなくてはならないものとなっています。

小さな町に日本を代表する製薬工場があることの凄さ、町の名が記された煙突があることの誇り。町の歴史と切っても切り離せない「製薬」は、時代が求める会社としてこれからも更なる進化を続けることでしょう。



昭和天皇御巡幸



昭和58年頃の製薬工場

この連載では、「ふるさと吉富町」を後世に伝える古い写真やエピソードを募集しています。掲載しても差し支えないものがあれば、是非ご紹介ください。なお、誌面の都合などにより掲載できない場合もありますので、ご了承ください。

問合せ：企画財政課(☎24-4071)